

「人には、自分がだれかから見られているということ意識することによって始めて、
自分の行動をなしうるところがある。」

私が勤務していた高校に、いじめなど起こりようのない学校があった。その学校で次のような経験をした。

女生徒「先生は知らんと思うけど、うちのクラスでいじめが起こりそうやねんで。」

私「ほんまか。知らんかった。」

女生徒「でもな先生、私らで何とかするから、心配せんとして。」

私「そうか。ほな、頼むわ。」

その後、誰も長欠しなかったし、いじめが起こった気配もなかった。やはり、その学校は、いじめが起こりそうになっても起こらないようにできる力を生徒たちにつけさせることができることも含めて、いじめなど起こりようのない学校であった。

この経験について、私の気持ちの中でずっと疑問となっていたことがあった。それは、

この女生徒はなぜわざわざ、いじめが起こりそうやけど自分たちで何とかするからと私に言いに来たのか、ということであった。

教師のくせにいじめが起こりそうになっていることになぜ気付かないのか、という論難ではない。いじめが起こらないようにする自分たちの努力を評価してくれ、という督促でもない。教師も自分たちのやることに加勢せよ、という要請でもない。だったら、教師に何も言わず自分たちだけで行動すればよいのに、なぜだろう。女生徒には何日か経ってから、一言「あのこと、おおきに。ありがとう。」とだけいった。第3者も関係することは詳しく話を聞かない方がよいと思ったからである。だから、疑問は残った。

そして、昨日、右に記載の記事の言葉を読んで疑問が氷解した。女生徒は、背後で教師にじっと見ているよ、という合図だったのだ。

そういえば、私は、授業以外の場面で「ほな、頼んだで。」という言葉多用した。例えば、ホームルームの時間に「今日は、修学旅行の宿舎の部屋割りを決めてもらう。ほな、頼んだで。」というように。また、宿舎の部屋割りなどで“はみこ”になる恐れのある生徒が出そうな時には、こっそりリーダーシップある生徒に「頼んだで。」と言うこともあった。これらは、背後でじっと見ているよ、という合図だったのだ。

折々のことば

驚田 清一 393

人には、自分がだれかから見られているという
ことを意識することによって始めて、自
分の行動をなしうるところがある

浜田寿美男・山口俊郎

幼児は、親がいつも決まった場所から自
分のことを見ているのを確かめてようや
く、安心して遊びに没頭することができ
る。誰かが背後でじっと見ていてくれるか
ら、逆にひとり、目の前のことに全力で取
り組めるというのは、もちろん大人たち
にも等しく言えること。発達心理学者の共著
「子どもの生活世界のはじまり」から。

2016・5・9 朝日新聞